
氷室の天地逆転？

冬霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷室の天地逆転？

【Nコード】

N2153I

【作者名】

冬霞

【あらすじ】

——「聖杯戦争」！

それは歴史上の偉人や神話の中の人物をこの世に呼び出し戦わせる、最小にして最大の戦争！

そう、これはそんな「英霊」たちの戦闘や、彼らを使役する魔術師たちの活躍を余す事なく……

——まったく描かない物語である（仮）。

第0話『魔法陣からこんにちわ』（前書き）

シリアスに見えてギャグでノーアクションなお話を目指していきたいと思います。

なお、こちらはサブの連載です。

作者がもう一つの連載を続ける最中に気分転換として執筆したりしてなかったりしています。

もちろん一切手抜きはありませんが、更新は超不定期ですのでご注意ください。

それでは新連載、『氷室の天地逆転?』をどうぞお楽しみあれ！

第0話『魔法陣からこんにちわ』

さて、その日の氷室鐘は常と全く変わらぬ生活を送っていた。

時は第二学年に上がってすぐの頃、ところは自宅の書斎の本棚の前。ちょうど明日の授業の予習を大体終わらせて一息つき、何ぞおもしろい本でもないかと父には無断——と言っても黙認状態だが——で棚を物色しているところであった。

「ほう、これは一体何であろうか……？」

彼女は巷では有名な博識である。知識のベクトルがやや偏っているとはいえ、それはこのマンションの中にしてはかなり広めの書庫に種類を問わず収納された数々の本に裏付けされたものであり、コンビニ、古本屋などから仕入れた意味不明な雑誌類など手段を問わずに収集してみた情報の真偽を疑うようなものからの知識も含まれている。

もちろん安直に鵜呑みにしたりすることはない。正しい知識を身につけるためには、その情報が正しいものなのかどうか、吟味するものに対して倍以上の情報を集めることによって吟味する必要がある、彼女はその術をしつかりと会得していた。

「……随分と古いな。手で綴じたものか。なになに、“冬木市魔術考察”……？ やけに古びているわりには中々にオカルトじみてい

ておもしろい」

とはいえ鐘にとっては知識を手に入れること自体が娯楽の一種。さらに言えばそれらを使って他人を煙に巻くのも大好きなのだが、とにかくこの信憑性や著者の正気加減を疑うような古い本は彼女の好奇心を刺激するに十分な神秘的な香りを秘めていた。……実際匂いもなかなかのものだったのだが。

他にも幾つかおもしろそうな小説などを調達すると、鐘は書庫に鍵をかけて自室へ向かう。うっかり破ってしまわないようにお目当ての古本は一番上に置くことも忘れない。

廊下で会った父には軽く書庫を漁ったことを断り、居間を通って母親には今日の分の勉強は終わったことを伝える。

比較的放任主義の両親の方針は、鐘が自分で自分をしっかりと律し、なおかつ両親の心配などでもできるという出来すぎる程出来た娘であるからだ。今少し年頃の女性としての所作に欠けるような気もしないではないが、あまり要求するのも気が引ける。

そんな彼らだからこそ鐘が書庫から本を持ち出しても何か言うことはなかった。もしここで何か言っていたのであればもしかしたら何か変わったのかもしれないが、おそらく何も変わらなかっただろう。

なぜなら彼女が縦に積んで運んでいた一番上に置かれたその本は、真実彼らにとっては何の意味もなさないのであったし、彼ら正体を看破できる類のものでもなかったからだ。

「さて、どれどれ……これはまた読みにくい書体で書かれている……」

内容はかいつまめば魔術と称される異端の技術に関する考察だった。

曰く、冬木の地は一級の霊脈であり、数多くの魔術師が存在するということだ。全くの眉唾ものではあったが、このような古い書物にそう言った最近のオカルト雑誌にでも載っているような内容が書かれていることが彼女の好奇心をそそる。

いつ頃書かれたものなのかは不明であるが、頁の上をのたりうねっている文字はおそらく達筆と称されるもので、それでもそういった文字に比較的慣れている鐘にすら読み解くことは困難であった。

よって彼女は大体を飛ばし読みにし、ふと、赤い墨を使って印がしてある頁の文章で目を止めた。

明らかに筆者がその部分を強調したいことがわかる。書物において最も重要な部分を読み解くことを得意とする鐘の勘が、その部分を集中して解読するべきだと主張している。

「――閉じよ、みたせ閉じよ、みたせ閉じよ、みたせ閉じよ、みたせ閉じよ。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を棄却する……？」

読むことすら既に困難な文字を追い、ついつい癖でそのまま口にする。

それは呪文だった。ただし一時期小学校で流行ったコックリさんのようなものではない。文面は日本語ながら、その横にはドイツ語でルビが振ってあり、言葉選びは子どもや狂信者のようなものではなく、詩のように組み立てられた詠唱だった。

どちらかといえばフランス語の方に造詣が深い鐘は大して気にもせずに日本語の方を口にする。

途切れ途切れでたどしくはあるが、時間をかけて解読してみた文面はおそらく正しいはずだ。戯れでえはあるがこういったこと

にも、むしろこういったものだからこそベストを尽くしたい。

そう思った彼女は興が乗ったのか、まるで映画や小説の魔術師のように、何もものをおいていない広げた部屋の中心へと立って呪文を唱えてみる。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ——」

呪文を唱えながらも不思議に思う。これは文面から察するに明らかに何かに対して呼びかけるものだ。だが含まれる単語が気になった。特に“聖杯”などは魔術とはあまり関連が見受けられない。

自分がこういったことをこうして試してみているなどということもおかしいのだが、それらしくはあるがどこか符合制の見られない詠唱がやけに真実味を帯びている。

しかしここまでやったのだから最後まで唱えてみよう。何もないに決まっているが、どうせお遊びなのだから意味がなくてもかまわない。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

さて、彼女にとって幸か不幸か——魔術という世界と聖杯戦争という殺し合いに関わるコトになってしまった以上不幸であるとは思うのだが、まあこういったことは本人が考えて判断することであろう——、いくつかの要因からこの英霊召喚の儀式は成立した。

ひとしきり暴風は彼女の自室をめくちやに荒らし、そして光と風が収まったときには、自分以外に誰もいなかったはずの部屋の中には一人の人影が現れていた。

「……サーヴァント、アーチャー。聖杯の寄る辺に従い参上した。問おう、君が私のマスターか？」

紅い外套を微かな風の残滓に揺らした白髪の騎士は、自信に溢れた笑みで目の前で呆然とこちらを見やる少女にそう宣言したのだった。

L e t ' s s t a r t h e r ' s A d v e n t u r e

第0話『魔法陣からこんにちわ』（後書き）

今回はアーチャーさんと氷室の邂逅です。

第0話の主な解説および言い訳はそちらでしっかりと行いますので、

『これ変じゃね?』といったご指摘はまた次回にお願いします。

それでは！

第一話『Hero meets Girl』（前書き）

弓さんは答えを得ています。が、例の如く現世の記憶はほとんど磨耗しています。

まあ厳密に言えば前に召喚されたのとは別の弓さんなわけですが。

第一話『Hero meets Girl』

「サーヴァント、アーチャー。聖杯の寄る辺に従い参上した。問おう、君が私のマスターか？」

簡単に言えば氷室鐘は激しく動揺していた。

自宅の書庫で見つけた異様に古びた書物。それに書かれていた謎の呪文。そしてその呪文を何の気はなしに詠唱すると現れた目の前の謎の不審人物。

呆然として上手く回らない頭に無理矢理潤滑油をさして強制的に再起動させる。この紅い騎士の言葉から事態を把握しなければならなからう。

まず彼が口にした不穏な単語。『サーヴァント』『アーチャー』『聖杯』『マスター』。

サーヴァントとは乃ち奴隷。アーチャーとは乃ち弓兵。聖杯はホーリーグレイルでマスターは主人。：：全く分からない。

いくら多方面に造詣の深い鐘と言えども、たったこれだけの文面から完全に自分が置かれた状況を把握するには些かばかり無理がある。ただファンタジー的な何かが起こり、この男を自分が召喚：：？　してしまったのだらうということは何とか想像することはできた。

次に男を観察する。肩から脇にかけてを覆う長袖の上着に腰布。

色はどちらも血のような紅だ。

髪は白。肌は褐色。明らかにその色は日本人離れているが、顔立ちは比較的親しみやすいものだった。とはいえその眼光は鷹のように鋭く、口元は皮肉気に片方をつり上げている。

土の香りはしないからブーツでフローリングを踏みしめていることはまあ許容しよう。明らかに戦闘、それも近接格闘戦を考慮した胸甲をはじめとしてどこかこの時代とはかけ離れた部分があるのもとりあえず雰囲気は出ているから脇に置く。

一番重要なのは、男に敵対する気配が感じられないということだ。
ファーストコンタクト
これは初対面としては非常に重要なことである。

「あー、サーヴァントと言ったが、まず汝が何者なのか教えて貰っても構わないか？」

よって、鐘はそこまで自分の思考を棚上げし、ひとまず理性的で事態を把握しているのであろうこの男に状況の説明を頼むことにした。

いきなりこの場に現れたあちらの方が今の状況に詳しいということも中々に不思議だが、まあそれも仕方がないことではあるだろう。状況次第では強がりもするが、何もかもが意味不明である以上強がるにしても空振りに終わりそうだし、なにより彼女は冷静であった。

「私が何者かだと？ まさか君は、何も知らないで私を召喚したというのか？」

「よく飲み込めないのだが、残念なことにそのようだな」

「……またこれか。まったく私はどれだけイレギュラーな召喚に縁があるのだから……」

鐘には理解できない心情を憶えたのか、その男……アーチャーは片手で顔を覆って天を仰ぐ。

その様子に少々イラツと来た鐘は、登場の方法のわりにはやけに人間味のあるアーチャーの態度に僅かに波打っていた動揺を押さえ込み、眼鏡と乱れてしまった髪の毛を整え、椅子に座り直して背筋を伸ばすと質問を再会した。

「私は『汝は何者か』と質問したのだから。自分が不法侵入者であることを忘れてはいはしまいか？」

「……成る程、失礼した。では私からも質問させてもらう。本当に何も知らないでこの私を召喚したのかね？」

「そうだとさっきから何回も言っている」

回りくどいのは嫌いではないが、同じやりとりを繰り返すつもりのない鐘はきっぱりと言い切った。

とにかく自分が何か超常現象でムー的な状況へ陥ったことはきちりきちきち理解した。ではまず目の前の不審者、もといアーチャーとやらと意思の疎通を謀って詳しく事態を把握しなければならないだろう。

「しかたがあるまい。本来は監督役に丸投げしてしまってもかまわないのだが……」

アーチャーは目の前の少女のために、自分が呼び出された理由と今マスターが置かれているであろう状況について詳細に……とはいかないが、それなりに詳しく説明した。

万能の願望器、聖杯。表の世界には隠匿されながらも存在する魔術。召喚された七騎のサーヴァントによる聖杯を巡る殺し合い。

それらは先ほどこっかりと召喚を目にしていなければ、何を世迷い事をと一笑に伏したかもしれないほど荒唐無稽な話ではあった。アーチャーとしては呼び出された以上自分の職分を全うするつもりではあったが、マスター如何によっては戦いを降りても一向に構わなかった。

彼にとっておそらく不幸として働いていた要素はだいたい三点。まず一つは、この少女がかつてのマスターであった遠坂凜並みの状況理解能力と頭脳を備えていたこと。そして余計なことに喜んで首を突っ込みたがる良い性格をしていたことだ。

「つまり汝はその、英霊だと？ 過去に人の身では余りある偉業をなしとげて死後に精霊に近い存在へと消化した人物だと？ アーサー王やヘラクレスやヤクザ者の英霊、花●馨に比する存在だと？ ……自分で言ってて恥ずかしくはないのか？」

「よく口が回るな、君は。というかそれでは伏せ字の意味がなからう。……が、おおむねその通りだ。私はアーチャーのクラスのサーヴァントとして召喚された」

「……証拠だ」

「は？」

「証拠を見せてもらおうか」

紅い騎士は正直に言っであっけにとられた。まさかと思うが自分が召喚されるという明かな神秘字を目撃していてなお、この事態を信じられないとでも言うつもりか。聡明な少女かと思ったが自分の勘違いであつたのか。

「……はあ、では何をして見せれば君は信じるのかね？」

「では手始めにマッスルドッキングを」

「それができるのは英霊ではなく超人だ。というかまずあと最低二人連れてきたまえ」

何故そんなことを知っている過去の人。あと最低二人ってことは自分にも参加させるつもりのか過去の人。
マスター

だがしかし氷室鐘はめげなかった。
ファーストコンタクト 初対面で大事なのはまず相手を自分のペースにのせてしまうことだ。

口八丁手八丁は大得意。ここは是非にでも良好な関係を築くためにも互いの立ち位置の模索を試みたい。

「では是非、蹴り込んだ水月を踏み台にして肩に駆け上っての蹴りを」

「……やれんことはないな」

「では！」

「だが断る」

「なにいいいい？！」

やたらにネタのかみ合わせがいい謎の紅い騎士に驚愕を憶える氷室。本当に英霊なのか過去の人。と言うかやはりその場合には自分が実験台になるのか過去の人。やっぱり最後は侠客立ちしなきゃいけないのだろうか過去の人。

だがとりあえず事態は思う方向に滑り出しているようだ。ペースを掴む事には成功した。一方的な蹂躪ではなく共同作業によるものだというのがやや最初の想定とは違うが、それもまあ良い相方を手に入れたということで納得しよう。

「しかし解せないことがある」

「？」

ふと眉をひそめて考え込んだアーチャーに、鐘は疑問符を発する。アーチャーはマスターの無言の催促に気がついたのか、「ああ、別段気にすることではないのだが」と前置きして話を始めた。

「英霊の召喚には必ず何らかの触媒が必要となる。その英雄が過去に持っていたものや、強く関連しているものなどだ。君は一体どんな触媒を持っていたのだ？」

「成る程。私は特にそのような大層なものは所持していないが……。それはあまりこの部屋から遠くてもいけないのだろうか？」

無言で頷いたアーチャーに、氷室は首をひねって考え込んだ。

それは当然。なにしろあまりにも範囲が広いようではしょうがない。通常触媒となるものは儀式に使う魔法陣の中央ないしは外周部、もしくはどれだけ離れていてもその部屋の中にはあるはずである。

例えば正史——ややこしいので Fate/stay night をこう呼称するが——においてランサーのサーヴァント、クーフリンの召喚に使われたルーン石のピアスや、アサシンのサーヴァントである佐々木小次郎の召喚に使われてそのまま依り代にもなった柳洞寺の山門。ギルガメッシュの触媒は最古の蛇の抜け殻であったし、セイバーの触媒は言わずもがな、衛宮士郎の体に埋め込まれた聖剣の鞘だ。アヴァロン

そしてアーチャーが遠坂凜に召喚された際の触媒になったのは、彼が死ぬ寸前まで持ち続けていた、生前の命の恩人である彼女の父の形見の、大きな紅い宝石である。

ここでアーチャーにとっての最後の不幸を述べておこう。

それはずばり、あまりにも永い間守護者としての時を過ごした彼が、生前の記憶のほとんどを磨耗し、思い出すことができなかったということであろう。

彼が思い出すことができたのは数少ない、印象に残っていた人物のみ。乃ち遠坂凜やセイバーなどだけだ。

「しかしそれは汝の真名とやらを聞かなければ予想すらできないのではないか？」

「ふむ、それも一理あるな」

だからここで彼が契約者^{マスター}に対する当然の義務として自分の真名をばらしてしまったことは、何ら非難できない当然にして必然の結果であろう。なにしろ彼自身未来にて活躍するわけだから有名どころか無名の英霊であるし、聖杯からは今が何年何月何日であるなどといった細かすぎる情報は入ってこない。せいぜいがあやふやにどのぐらいの年代である、といったことのみだ。

むしろ今のこの瞬間に限定した彼には遠坂凜から“うっかり”のスキルを継承したのでは、とすら思える迂闊さがあった。それは予想外にも一般人でありながら聡明なマスターを得たことや、その少女によってギャグ漫画独特のペースに引き込まれてしまったことや彼女が穂群原学園の制服ではなく私服を着ていたことも関係する。が、もちろんそれらは言い訳にはならないし、まあ言い訳するようなことでもない。

とにもかくにも次に紅い騎士が発した言葉は、ある人物と同じ学校の同じ学年に所属する氷室鐘にとっては落雷にも匹敵した驚きを与えるものであった。

「まあ知らないとは思うが言っておこう。私の真名はエミヤ。鍊鉄の英雄、エミヤシロウだ」

「え、衛宮士郎?!」

「？」

さらに不幸なことに、生前の衛宮士郎は氷室鐘との特別な関わりが無く、全くといって良いほどに彼女の情報及び記憶が欠落していた。もしくは残りの二人、穂群の黒豹と慈愛の聖母と一緒にあれば気づいたかもしれないが、今話すのは詮無いことであろう。

だから彼は目の前の少女が異常な驚きを示したことがわからず、はてどうしたのであるかと目をぱちくりさせるのみ。その表情にはどこか愛嬌さえ感じられたが、鐘にそんなことを気にする余裕はなかった。

「つ、つかぬ事を聞くが、汝、生前は“ブラウニー”やら“バカスパナ”やらと呼ばれたことはなかったか……？」

「“バカスパナ”はやめてくれ——って、ま、まさか……?!」

故にこの驚きも自分のマスターが旧知の間柄であったという驚きではない。純粹に自分が生前の自分と同年代に召喚されてしまったことに対する驚愕である。

同様に鐘も驚愕の極みであった。なにしろ恋愛探偵として密かにきな臭い香りがする予感があるとマークしていた穂群のブラウニーが、成長するとロング・トール・アーチャーで多摩の巨人になるなどと誰が思ったであろうか。いや、英霊云々というより身長的な意味で。

「成る程……では私を呼んだ触媒はそれだったのか」

「ん？ ……こ、これは今日の昼、衛宮某に借りたままうっかり持って帰ってきてしまった万年筆ではないか」

と、アーチャーは鐘の胸ポケットに差してあった一本の万年筆に気づき、それを——意外に豊かな二つのふくらみに万が一にも触れないように注意しながら——引き抜いて手に取った。

それは生前の彼の質素な生活からは意外に思える程高級でしつかりとしたものだ。

実はこの漆塗りの立派な万年筆、昔まだ義父である衛宮切嗣が存命の際に彼からプレゼントされたもの。非常に使いやすいそれを衛宮少年は大人になってからも愛用し、なんと死ぬ瞬間まで懐に持ち続けていたのだった。

「な、なんてロマンのない触媒に召喚……」

「……結果として私が召喚されてしまったのだから、ロマンがない云々と落ち込むのは失礼だと思わないのかね？」

意外に紅い騎士はナイーブなようだ。体は剣で血潮は鉄、でも心は硝子で出来ている……。

平気なように見えて実は後でこっそり部屋の隅で泣いている。そんな健気な弓兵であった。

「ところで衛宮某」

「アーチャーだ」

「ではアーチャー、一つ頼みがあるのだが」

俯いてこの世全ての不幸をかみしめていたアーチャーは、鐘の言葉にのろのろと顔をあげる。

さてはマスターとして最初の命令であろうか。『自分の言うことを聞け』やら『部屋の掃除』やらだったらまた静かに体育座りして泣かせてもらうが。

と、彼女の視線が自分を向いていないことに気がつく。僅かにそれ、後ろの方を見ているようだ。

不思議に思った弓兵はゆっくりと視線を巡らせて――

「あそこの私の両親にも、さっきと同じ説明をしてはくれまいか？」

呆然とたたずむ氷室夫妻を発見したのであった、まる。

L e t ' s s t a r t i n t r o d u c e

第一話『Hero meets Girl』（後書き）

のんびりいきたいと思います。

あと色々ネタは自重していかないので、頑張ってます。てきてください。

え？ お前の方こそついてきやがれ？ 上等！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2153i/>

氷室の天地逆転？

2010年10月10日22時39分発行